

平成30年度自己評価表

鳥取県立境高等学校 平成31年2月20日現在

中長期目標 (学校ビジョン)	21世紀に生きる社会人として、生きる力と豊かな人間性を育成する。 ・多様な生徒に応じた教育課程・クラス編成等により、学力の向上と進路を実現する。 ・切磋琢磨し、自己の多様な能力・適性を発見して才能の開花を図る。 ・地域に信頼され、地域の期待に応え、地域を支える学校づくりをすすめる。 校訓 「文武両道」「質実剛健」	今年度の 重点目標	1. 人間教育（命の教育）を充実 2. 学ぶ姿勢を確立して目指す進路を実現 3. 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚 4. 基本的生活習慣の確立とコミュニケーション力の向上
-------------------	---	--------------	--

評価項目		評価の具体項目	年 度 現状（29年度の実績から）	当 初 目標（30年度の目指す姿）	目標達成のための方策	達成状況	評 価 結 果（最終評価）	改善方策
1. 人間教育（命の教育）を充実	B	○「自分や他人を大切にすることができた」と回答する生徒の割合が9割を超えること。 ○「生徒は自分や他人を大切にすることができるようになった」と回答する教員の割合が9割を超えること。	○生徒情報を共有し、ていねいな指導、支援を意識し、連絡即対応がおおよそできている。一方で悩みをかかえている生徒の相談に対し、各部署の連携ができない場面もあった。 ○性や命に対する意識が希薄な生徒や、自己肯定感が低い生徒に対する指導のあり方を考える必要がある。 ○保健室と相談室の連携を密にし、事例があれば保健部を通じて管理職及び当該学年団へ報告して対応を図った。	○生徒の細かな変化、気になる言動に注意を向け、生徒一人ひとりの状況を全教職員が把握できているという人権尊重意識の高い職場 ○人間教育全体計画（仮称）を作成し、教育環境を改善・整備 ○SNSの使用によって相手のことを非難・否定する行為の根絶	○悩みを抱えていたり、嫌な思いをしている生徒の声を拾える機会を増やしていく取組を強化する。 ○規範意識・人権意識は、担任だけでなくクラスや生徒に関わる副担任・部活動顧問・教科担当等多くの教員に関わることで形成されるため、学校全体で生徒を育てる手立てを構築する。 ○SNS上でのトラブルは必ず起こるものという前提に立ち、保護者を含めて研修や講演の機会を増やすとともに、トラブルに巻き込まれたときに相談できる窓口を設けたり、紹介したりする。	○12月アンケート項目「自分や他人を大切にすることができた」に対し、「あてはまる」と回答した生徒の割合は7割を超えた。「だいたいはあてはまる」を合わせたところ10割となった。 ○12月アンケート項目「生徒は自分や他人を大切にすることができるようになった」に対し、「あてはまる」と回答した教員の割合は3割を下回った。 「だいたいはあてはまる」を合わせたところ9割となった。 ○教職員は、あいさつや日常の声掛けを励行し、生徒の変化に気づく努力をした。また定期的な学校生活アンケートや保健室の記録、部活動顧問等、様々なチャンネルからの情報をもとに、生徒の声を拾って迅速な対応を心掛け、問題の深刻化を防いでいる。実態把握・問題対応に向けて報告・連絡・相談を徹底する組織的な仕組みができたことと事実である。 ○各学年の情報交換会を原則的に各学期に一度設けて、問題や困り感を抱える生徒の情報共有を図り、日々の指導に生かすことができた。 ○SNS上のトラブルの根絶に關し、保護者を含めた研修や講演の機会の設定、適切なSNS利用に関する図書を購入し活用、長期休業前の文書での注意喚起等、未然防止の取組を行った。 ○ホームルームにおいて、SNSの問題を取り上げ考えさせたり、「命の教育」をテーマとして参加型の学習を取り入れたりして、生徒自身が調べ、発言する活動を行う機会を設定できた。	○継続して生徒の細かな変化、言動に注意を向けるとともに、アンケートや個別面談の機会の充実を図り、「待ち」ではなく「攻め」の姿勢で生徒の変化に対して組織的に対応する。 ○「人間教育（いのちの教育）全体計画」の目標を達成するため、規範意識と人権意識を身につけさせるとともに、「いのちの教育講演会」を開催する。 ○児童相談所等の専門家による教職員対象の研修を充実させ、教職員の相談スキルの向上を図る。	
		○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒の割合が5割を超えること。 ○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」に「あてはまる」と回答した生徒の割合は3割であった。 ○放課後、3年団では学習室を設定し、12月時点で30人前後の生徒が自主的に居残り学習を行った。個人成績のみではなく、受験生としての連帯感を強めることができる等、効果があった。	○学年団・進路部の連携による生徒への働きかけ、英語科による多読授業によって、学ぶ姿勢を身につけようとする生徒が増えた。 ○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」に「あてはまる」と回答した生徒の割合は3割であった。 ○放課後、3年団では学習室を設定し、12月時点で30人前後の生徒が自主的に居残り学習を行った。個人成績のみではなく、受験生としての連帯感を強めることができる等、効果があった。	○生徒が3年間をととして進路目標を持ち、その実現に向けて努力する姿の確立 ○主幹教諭・教科担当者による個別面談指導の強化 ○学習のつまづきを随時克服する体制の構築 ○週明けテストをはじめ校外模試等を大切にしている態度の確立	○1年次生の習熟クラスを中心に生徒の学習を支援するクラウドサービスを導入し、自ら学ぶ力を育成する。 ○2年次生は、上級学校訪問や先輩との交流、民間企業へのインターンシップ等の取組をとおして、学ぶ意欲（「なぜ学ぶのか」）を徹底する。の向上を図る。 ○3年次生は習熟クラスを中心に土曜日学習会を開催し、大学受験に対応できる学力を育成する。 ○現在の生徒の状況から考えると学校内で放課後等の時間に学習場所を確保することは必要である。しかし、どこかのタイミングで自宅で取り組むことができるような方策を検討する。 ○週明けテストの優秀者を学期ごとに表彰する等、生徒のモチベーションを上げるような取組を実施する。	○12月アンケート項目「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」に対し、「あてはまる」と回答した生徒の割合は2割であった。「だいたいはあてはまる」を合わせたところ7割を超えた。 ○習熟クラスおよび希望者に提供している学習支援サービスは、軌道に乗ってきたというが、取組に個人差が生じており、自ら学ぶ力を育成できているかは今後の検証課題である。 ○1年次生は企業を招いてのキャリア塾、2年次生のインターンシップ・先輩との交流・上級学校訪問の取組により、生徒のキャリア意識がより一層高まった。 ○土曜日学習会は計画通り開催した。（天候等不測の事態で1回取り止め） ○生徒の基礎学力が年々低下している中、いろいろな取組を実施したが、顕著な学力向上までには至っていない。家庭学習を定着させる取組等が必要である。また、放課後遅くまで学習に取り組む生徒が見られるが、個人の厚意によるものであり、改善する必要がある。 ○週明けテストの優秀者の人数が減っており、学習に対するモチベーションの低下が懸念されるが新規の仕掛けを作ることではなかった。 ○生徒への図書貸出冊数は昨年度同時期（12月末）と比較して9％増加した。	○「今の学習が、各目の将来の可能性を広げるものであること」を様々な機会をとおして生徒に伝え、意識化させていく。 ○土曜日学習会を継続実施し、学習会の中で生徒一人ひとりが自ら計画した内容に主体的に取り組むことができるよう改善を図る。 ○講習（放課後・長期休業中）や習熟クラス（クラス編成）のあり方について再検討を行い、生徒の学力向上につなげる。 ○classiの活用と成果を教職員全体で共有する。 ○調査の振り返りシート等をファイルに保存する等、学校全体で新テストに向けての取組を共通理解していく。 ○週明けテストについては、学期ごとに表彰すべきとか、一般常識問題を導入すべき等の意見があり改善を進める。	
2. 学ぶ姿勢を確立して目指す進路を実現	C	○「授業の内容に興味がわき、理解が深まった」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業を8割以上の教員が実践すること。	○中国語、ハンガルの選択している生徒が国際交流やコンテストに参加する等、意欲的に取り組む姿が見られた。 ○県外で開催された授業改革のための教科別の研修に4名が参加、先進校や高大接続改革のセミナーには、のべ13名を派遣し、その成果を校内の授業改革に還元した。	○アクティブラーニング型授業を取り込んだ授業研究会並びに授業参観週間での各教科代表による公開授業の定着 ○カリキュラム改革の推進し、習熟クラスを充実 ○新大学入試に対応した進路指導のあり方を構築	○生徒の主体的で深い学びを実現するため、アクティブラーニング等授業法の研修を重ね実践に活かす。 ○学校設定科目「英語多読」や「ハンガルの」「中国語」の充実発展を図るとともに、外部講師等と連携した出前授業の機会を増やし、指導法の改善を図り、学習意欲を高める。 ○専門家と協働した授業をすべての教科で実施し、教員の授業力の向上を図る。	○12月アンケート項目「授業の内容に興味がわき、理解が深まった」に対し、「あてはまる」と回答した生徒の割合は2割を下回った。「だいたいはあてはまる」を合わせたところ7割となった。 ○科目「ハンガルの」「中国語」選択者がスピーチコンテスト大会に出場し、韓国語部門では生徒2名が県代表として全国大会に出場した。 ○9教科で外部講師や専門家を招聘した授業を実施するとともに、授業公開週間を設定し、全教科で公開授業を実施した。少しずつ生徒の主体的活動を中心とした授業アプローチも増え、全教科において工夫する意識が見られるようになった。 ○タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業は、7月末時点で14.6%の教員しか実践できなかった。	○科目「ハンガルの」「中国語」の授業では、異文化理解のための活動を行ったり、タブレットの録画機能を使って、生徒自身が自分の成果を評価したりすることで、学習の振り返りができるようになった。この成果を他の教科・科目に応じる仕掛けを作りたい。 ○アクティブラーニング型授業は、教員側より一層の研鑽をとおして、自発的に生徒が学べるような環境作り（境高式アクティブラーニング）を検討する。 ○タブレットの保管場所について検討する必要がある。職員は使いづらさを指摘しており、このままではタブレット端末の利用促進は難しい。	
		○大学入試センター試験の出願率が7割を上回ること。 ○国公立大学現役進学者数が30名を超えること。	○学力上位の生徒の学力を伸ばさせていない。 ○大学入試センター試験の出願率は、38.1%（75名）であった。 ○国公立大学現役進学者数は、23名（3月現在）であった。	○キャリア教育全体計画に基づいた明確な進路目標を設定 ○3年間を見通した指導による進路希望の実現 ○習熟クラス等の目的別クラス編成に応じた丁寧できめ細やかな学習指導の実践	○学習・部活動の両立ができるよう、顧問・担任・進路で情報共有し生徒の進路実現を支援する。 ○校外模試対策（模試の振り返り）等の充実を図り、受験に対する意識を高める。 ○目的別クラス編成に応じた授業展開を推進し、ノート点検・副教材・小テスト等を多角的に授業に取り入れ、授業を基軸とした学習習慣を確立する。 ○総合的な学習の時間の見直しを図り、平成31年度2年次生から探究型の学習を導入する。	○大学入試センター試験の出願率が64.2%（124名）となり昨年の38.1%を大きく上回った。 ○国公立大学現役進学者数が10名で昨年を下回った。 ○担任・進路・部顧問で連携し、部活動のみに偏らないよう、学力保障・進路実現に向けての取組ができた。 ○模試の振り返りをしたり、過去問に取り組ませたりすることで、受験への意識を高めた。 ○目的別クラス編成は、各教科とも授業や課題に工夫をし、学習習慣の確立や学力向上に資するなど機能している。 ○総合的な学習の時間について、プロジェクトチームを編成し、来年度から名称を「境考学」として生徒主体の探究型の学習に改善する準備を進めている。	○学習と部活動の両立支援に、継続して各教職員が努めていく。 ○英語外部試験の研究を進める等、生徒が新テストに対応できるよう継続的に授業改革に努める。 ○家庭学習時間調査を用いて、基礎学力をつける学習習慣を確立させる。 B ○面接やプレゼンテーション（考えをまとめ他者に伝える力）等の受験に対応できる学習方法を1年次生から指導していく。 ○生徒が自分の興味関心、地域や進路に関わった探究的な活動を実施し、自ら調べ考察し発表する力をつけるために「境考学」を実施する。	
3. 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚	B	○「部活動に入ってしっかり頑張った」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○全国大会出場者80名を超えること。 ○全国大会入賞者5名を超えること。	○部活動加入率は高く、習熟クラスの生徒も部活動と勉強の両立に努力している。生徒は文武両道に対して前向きに頑張っているが、一部生徒は未だに部活動に偏っている。 ○全国大会出場者は55名であった。 ○ヨット部の国民体育大会入賞、男女ハンドボール部や写真部等が全国大会に出場する等、部活動が活性化している。 ○「部活動に入ってしっかり頑張った」と回答する生徒の割合が6割を超えた。	○部活動の充実による特色ある教育の実践 ○文武両道の活力があり地域の誇りとなる普通科高校として存在 ○県トップレベルの実績を持つ部活動を維持育成し、学校内外に活力ある境高を発信	○主幹教諭等を中心に生徒が部活動と学習活動の両立を図ることができるよう、部活動だけに偏るような生徒については意識変更を図る。 ○外部指導者の充実を図るとともに、施設・設備等の充実を推進し、部活動にしっかりと取り組める教育環境を整える。 ○中学生向けパンフレットの作成や運動部の紹介ビデオ作成により、地域・全国へのPR活動を推進する。 ○1年次体育クラスに専門的な講師を招いて、部活動に対する関心・意欲の向上を図る。	○12月アンケート項目「部活動に入ってしっかり頑張った」に対し、「あてはまる」と回答した生徒の割合は7割を超えた。「だいたいはあてはまる」を合わせたところ10割となった。 ○全国大会出場者は42名で目標を下回ったが、中国大会には運動部163名、文化部25名が出場を果たすとともに、文武両道を図るよう各部で指導することができた。 ○ヨット部2名が全国大会で2年連続の入賞を果たした。 ○部活動だけに偏ることがないよう、学習面で課題のある生徒は補習を行うなど、教科担当・部顧問が連携し、両立の意識づけをした。 ○中学生向けパンフレットや運動部の紹介ビデオは発信力のある良いものが作成され、地域や全国にPRできた。 ○中学校教職員対象のアンケート項目「境高校は、部活動の振興に力を入れて取り組んでいると思いますか」に約9割が「そう思う」と回答した。	○部活動と学習の両立ができるよう、学習面で課題のある生徒は補習を行う等、引き続き教科担当・部顧問が連携し、両立の意識づけを行う。 ○鳥取県運動部活動の在り方に関する方針に基づき、部活動の再編並びに顧問の適切な配置、参加大会の精選を行い、より一層保護者との連携・協力を密にする。 ○パンフレット「チーム境高」を活用し、教職員全員が学校のルールやきまりを共有して生徒の指導にあたるとともに、その改善に努める。	
		○ボランティア活動に参加する生徒の数が増加すること。 ○ボランティア活動、学校周辺清掃、部活動等の取組をとおして、地域との連携が進んでいる。 ○ボランティア活動に参加した生徒はのべ49名であった。 ○1年次生対象の企業から学ぶ、キャリア教育の新しい取組は、生徒も企業側もとても良い印象で終えることができ有意義なものとなった。	○スクールプロジェクト等の異校種間交流（連携）や、地域に要望に応じて地域に出て行くく部活動の取組も充実している。 ○ボランティア活動、学校周辺清掃、部活動等の取組をとおして、地域との連携が進んでいる。 ○ボランティア活動に参加した生徒はのべ49名であった。 ○1年次生対象の企業から学ぶ、キャリア教育の新しい取組は、生徒も企業側もとても良い印象で終えることができ有意義なものとなった。	○地域のボランティア活動への積極的な参加 ○部活動において地域の人材の力を借りたり、生徒が小中学生に学習やスポーツを指導したりすることで地域の信頼を獲得 ○キャリア教育において、児童・学生・大人等と関わりを深め、価値観の異なる他者とのコミュニケーションを図る力を育成	○境高スクールプロジェクトを年6回実施する。 ○1年次生キャリア研修では、地域の企業等から講師を招き、将来地域の発展に貢献する意欲を育てる。 ○キャリア教育全体計画の改善をすすめて、各事業の目的を一層明確化し、共通認識のもとで行う指導を徹底する。	○ボランティアの意識は上がっており、ボランティア活動に参加した生徒は昨年のべ49名から139名へと大幅に増加した。 ○スクールプロジェクトや部活動による地域と連携した取組は、参加児童等全員が「参加して良かった」と回答する等、高く評価された。 ○キャリア教育全体計画に基づき、地元企業に学校に来てもらったり、大学訪問を計画的に進めたりして順調に実施することができ、生徒のキャリア意識の向上につながった。	○ボランティア活動の大切さについての情報を1年次生から生徒に伝える工夫を行う。 ○スクールプロジェクトを例年通り計画的に開催する。 ○キャリア教育全体計画の中に「境考学」を組み込み、各事業の目的の一層の明確化を図り、共通認識のもとで行う指導を徹底する。	
4. 基本的生活習慣の確立とコミュニケーション力の向上	B	○「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○主権者教育、消費者教育、環境教育等の取組をとおして、社会人講師（地域で活躍する大人等）の話を聞く機会を10回以上設定すること。 ○ゴミの分別・減量化について、平成25年度との比較で継続して減量を実現すること。	○挨拶・服装・頭髪・清掃への取組など基本的な生活習慣は定着している。挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」と回答する生徒の割合も6割を超えている。ただし、挨拶は運動部の生徒を中心にできているが、女子の挨拶は改善が必要である。 ○学年集会を機度も行い、本校生徒のあるべき姿について考えさせ、生活態度・モラル向上を図ることができた。 ○1年次生4月の人間関係育成研修は生徒からの評価も高く、効果が大きかった。	○挨拶の励行、服装・清掃指導等の徹底 ○人間性やコミュニケーション能力の向上 ○けじめある生活態度の確立 ○情報モラル教育の充実	○生徒の自主活動を促し、生徒活動の充実を図る。 ○服装・頭髪・挨拶等について生徒の自覚を高め、服装再指導による個別指導の徹底を図る。 ○交通規則（法規）遵守、携帯電話・スマホ等使用上のモラルの向上を図る。 ○整理整頓、貴重品管理等、日常の生活意識の向上を図る。	○12月アンケート項目「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」に対し、「あてはまる」と回答した生徒の割合は7割を超えた。「だいたいはあてはまる」を合わせたところ9割となった。 ○マナーアップ運動等の学校行事で、生徒会執行部を中心に自主的に活動することができた。 ○頭髪服装指導を徹底することができ、年間を通し違反者は少なかった。 ○スマホ等の使用については、保護者・生徒に文面で規則や指導方針を確認し、担任が日々指導しているが、SNS上のトラブルは発生している。 ○列車マナー、挨拶などは現状ではまだ十分とはいえない。 ○盗難の発生が頻発した学年があったが、教室等の施錠を徹底し、貴重品等持ち物の管理を強化することで問題を未然に防いでいる。	○教職員対象のリスクマネジメント研修を実施し、組織的な生徒指導を実践する。 ○生徒会による挨拶運動等、生徒の主体的で活発な活動を促す。 ○列車マナーの改善を図るため、年間を通して全教職員で列車指導を実施する。 B ○基本的生活習慣の確立に必要な心身共に健康な状態を維持すべく、学校生活環境を整え、全教職員で引き続き生徒自身の意識を高めるよう努める。	
		○社会人講師を活用した授業や特別活動を実施すること。 ○主権者教育、消費者教育、環境教育等の取組をとおして、社会人講師（地域で活躍する大人等）の話を聞く機会を10回以上設定すること。 ○ゴミの分別・減量化について、平成25年度との比較で継続して減量を実現すること。	○社会人講師（54名）から話を聴く機会を設定することができた。 ○主権者教育、消費者教育、環境教育等の取組をとおして、社会人講師（地域で活躍する大人等）の話を聞く機会を10回以上設定すること。 ○道路先で生徒が困らないように、また相談できるように、大学入試センター試験後に専門家にによる講演等を計画し、生徒が社会を生き抜く力の育成を図った。 ○ゴミの減量化について、平成25年度との比較で32.3%減（2月現在）を実現できた。	○生活指導と結びついた体験的な教育活動の活性化 ○社会に参画する力の育成 ○生徒が主体となって取り組む学校環境の整備	○ボランティア活動への参加を奨励するなど、生徒が学校とは異なる集団の中で自己を表現する場面を設定する。 ○校外のゴミ拾いだけでなく、トイレの徹底掃除、教室の換気等、生徒が校内環境改善の先頭に立たせる活動を増やす。 ○学校祭は生徒会執行部の中心に、さらに生徒主体の自主活動を充実させる。 ○県教委事業（生徒と社会がつながる教育推進事業）と連携するなど社会人講師の活用の充実を図る。 ○日々の清掃活動や学校周辺清掃の徹底、ゴミの分別・減量化を引き続き推進する。（平成25年度との比較で6%減の実現） ○健康観察等の充実と適宜声かけ等、親身な指導を推進する。	○社会人講師を活用した授業や特別活動を実施し、専門家（44名）から話を聴く機会を設定することができた。 ○ゴミの減量化について、平成25年度との比較で52.6%減（12月現在）を実現できた。 ○学校祭では今年度から担当を決め、生徒の自主的な活動を支援することができたが、活況不足で一層の改善が必要という声もあった。 ○保健委員による毎日の健康観察簿の提出（把握）、インフルエンザ流行期における注意喚起と教室の換気を行うことができた。 ○学校周辺清掃への参加者が、毎回100名程度あり、積極的に校内外の美化活動に参加する生徒が増えている。 ○ゴミの分別状況、電力消費量についての報告を環境委員が行い、全生徒に啓発する機会を設けることができる。	○「境考学」の中で、生徒が地域に出て学ぶ機会を充実させる。 ○「生徒と社会がつながる教育充実事業」の継続・発展を図り、社会に参画する力を育成する。 ○生徒会を中心に、学校祭の一層の充実を図る。 ○環境委員を通じて、ゴミの分別の徹底・減量化などの活動を継続して実施する。	

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し